平成31年3月1日　(月刊1日発行)　能楽タイムズ　第804号　(4)

インタビュー

新作能「たたかわざる者」
宗片邦義氏に聞く

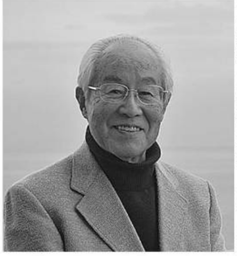
ブライズ先生の能

——宗片さんは、三月二十四日（日）に観世能楽堂で、ご自身の原作である新作能「たたかわざる者」を上演なさいます。副題には〈ヘンリー・ソローとR・H・ブライズ〉とありますが、まずは、この作品の概要からお話いただけますか。

宗片　この作品は私の原作ですが、作能・シテは津村禮次郎師にお願い致しました。物語は、今上天皇の皇太子時代の家庭教師でもあった、R・H・ブライズ——通称、ブライズ先生をシテに展開します。時は一九六四年十一月、アメリカの著名なソロー研究者ウォールター・ハーディング教授が連続講演のために日本を訪れます。教授はこの来日時にブライズ先生に会うことを願っていましたが、先生は先月亡くなったということを学生に告げられます。ハーディング教授は学生の案内で大磯のブライズ邸を訪ね、また北鎌倉の東慶寺の墓所に詣でるのですが、そこでブライズ先生の霊が現れ、自身の考えや理想を語り、消えて行くというストーリーです。実は、これは私の実体験がかなり元になっていて、この学生にあたるのが、当時大学院生だった私自身なのです。

——宗片さんは以前、『ブライズ先生ありがとう』（二〇一〇年／三五館）というご本を出版なさっていらっしゃいますね。この本の中でも様々なエピソードが語られていますが、それは今回の新作能にも反映されていらっしゃるのでしょうか。

宗片　その通りです。そもそも、ブライズ先生と私との出会いは、私が茗荷谷の東京教育大学（現・筑波大学）の学生だった頃に遡ります。先生は大学に非常勤講師として来られていて、私は学部一年生から大学院までの延べ九年間、ブライズ先生の教えを受けるんです。先生の受け持たれていた授業は専門科目の英文学講義でしたので、普通は単位を取得したら受講する必要はないのですが、私はこのブライズ先生という方が大好きで、ずっと授業に出続けていました。陛下は皇太子時代、約二十年にわたりブライズ先生の教えを受けていらっしゃいますが、二番目に長いのがたぶん私だと思いますよ（笑）。その先生が大変尊敬していらして、授業でも度々言及されたのがこの新作能にも登場するヘンリー・ソローなのです。ヘンリー・ソローはアメリカの作家、いわば哲人で、メキシコ戦争への抗議や奴隷制度反対などで有名です。作家としては人間と自然をテーマにした作品や大量の日記を残しているのですが、そのソローをブライズ先生は「アメリカで最も偉大な人間だ」と繰り返しおっしゃっておいででした。そういった根本的思想の繋がりがあり、公開の新作能では、能で言うワキに当たる人物にソローと所縁のあるハーディング教授を出しています。



宗片邦義氏：静岡大学名誉教授。国際融合文化学会会長。シェイクスピア四大悲劇を原文のまま英語能に創作、自らシテを演じ、国内外で公演。漱石が明治 44 年に提唱した日本語シェイクスピア能は、津村禮次郎シテ「能〈オセロー〉」で実現。著書に『英語能ハムレット』（平成３／研究社）、『ブライズ先生ありがとう』（平成 22 年／三五館）ほか。平成 27 年「瑞宝中綬章」受章。

——いつ頃から構想されていたのでしょう。

今回の公演チラシ。真ん中で座禅を組んでいるのが京城時代のＲ・Ｈ・ブライズ。

宗片　ブライズ先生のことは、いつか能に出来たらとずっと思っていました。ただ、今回このタイミングで書いたのは、やはり今上天皇が御退位をお決めになったということがひとつ大きくあります。ひとつの区切りと言いましょうか。天皇皇后両陛下は、震災地をはじめ戦争などで被害を受けた被災地へ、慰労・慰霊の旅にお出かけになられていらっしゃいますが、その際に御身を低くされてお話されておいでですよね。そのお姿を拝見していて、そこにもブライズ先生の教えが生きているのではないかと私は思うのです。先生の教えのひとつに「位の尊い人は、いつも低い人に仕えるつもりで」という言葉があります。両陛下のお姿に、ブライズ先生の面影が重なって、そのあたりも、今書かなければと思った理由なのでしょう。ですから、台本は、ご退位が発表された一昨年から書き始めて、昨年のはじめにはほぼ出来上がっていました。実は今回の上演に先立ち、アメリカのソロー学会にこの新作能の英語台本を送ったところ、学会誌『コンコード・ソーンタラー』（二〇一八年号）に台本全文と私の解説が掲載されたのです。編集者にも「これはイヴェントだ！」とおっしゃっていただいて、これも非常に嬉しいことでした。

反戦、非暴力、生命尊重

——「たたかわざる者」というタイトルでお書きになられましたが、この作品に込められた想いを教えてくださいますでしょうか。

宗片　一言で申し上げますと「非戦」。それと「非暴力」、「生命尊重」。絶対戦争をしてはいけないのだ、という強いメッセージを込めて書いたつもりです。ブライズ先生の思想の根本には——直接的な言葉を使われたことはありませんでしたが——常に「戦争反対」というお考えがありました。先生ご自身は一八九八年にロンドンでお生まれになって、高校卒業が第一次世界大戦中の一九一六年で、当時は十八歳になると徴兵検査があったのですが、先生はそこで「ドイツはイギリスの敵であっても、ドイツ人は私の敵ではない」「私は人を殺すことが出来ない。だから兵隊にはなれない」と兵役を断るんです。その結果、終戦まで刑務所に入れられることになりました。先生は、授業の際に戦争のことに触れられて「人をひとり殺せば殺人罪なのに、大勢殺せば英雄ですか」とおっしゃったこともありましたが、こういった言葉からもわかる通り、先生は国家や民族というような概念ではなく、常に「人は人」として考えていらっしゃいました。また、「非戦」ということでは、私は近年の日本の政治情勢に大変危惧を抱いています。何より、リーダーと呼ばれる政治家の方々の憲法に対する国際感覚が欠如しているのではないか……。例えば、日本が憲法を変えるということは、海外からは「平和国家だったはずの日本が、戦争国家に変わるのだ」という目で見られてしまう。細かい理由はあるのかもしれませんが、単純に報道されてしまうことで、日本という国家の根本的な思想、理念が誤って認知されてしまうのです。そういうこともすべて含めて「たたかわざる者」というタイトルで、メッセージを届けられたらと思っています。

——色々なエピソードが語られるのでしょうね。

宗片　ブライズ先生は、今上天皇の皇太子時代に長いこと家庭教師を勤められていらっしゃいましたよね。教えられていたのは英語ということになっていますが、先生ご自身は「人の生き方について教えています」とお答えになられていたそうで、この言葉は今回の新作能の中にも入れています。先生が家庭教師をしていた際の有名な逸話があって、ブライズ先生と陛下が向かい合ってお勉強していた際に、先生がペンを落としてしまわれた。さて、どちらが拾うべきか……ということを先生がお聞きになったら、当時中学生だった陛下は「近い人が拾うべきだ」とお答えになられた。それに対して、先生は「合理主義や科学主義では心は通じないんですよ」と、「身分が高い人は、いつも人を助けるつもりで思いやりを持っていなければならない」とおっしゃられたのです。それは「ノブレス・オブリージュ」というラテン語で、西洋では位の高い人はみんな知っている言葉なのだと。またある時は、大学の授業の板書で「ｌｏｖｅ＝ｈｅｌｐ」、つまり「愛とは、助けることだ」と我々におっしゃったこともありました。そういった考えを、先生は常にお持ちでいらっしゃって、それは時代を超えて伝えていくべき先生からの大事なメッセージでしょう。

——作品内ではブライズ邸のあった大磯を廻り、北鎌倉東慶寺に辿り着きます。ブライズ邸は大層風変わりに描かれていますが、これは事実なのでしょうか。

宗片　これは事実ですよ。木造の二階屋で、広いお部屋の真ん中に大きな松の木が床と天井を突き抜けて植わっているの！（笑）私は先生が亡くなってから訪れていますが、かなり驚きましたよ。しかも、この家というのは先生が学習院を定年後、おひとりで建てられたものなのですね。これは、おそらくヘンリー・ソローへの信愛の証なのでしょう。彼もまた、ボストン郊外のウオルデン湖畔にひとりで小屋を建てて暮らしていたことがありました。ブライズ先生にはそういった、ある種、純粋とも言うべき心があって、それは信念と言換えられるかもしれませんが、だからこそ我々の心に直接訴えてくるのです。

——台本を拝見すると、登場人物の名前はもちろん、詞章にもところどころに英語が登場しますよね。これは謡う側にとっては苦労するところではありませんか。

宗片　私は英語能「ハムレット」をはじめ、英語の詞章に謡の節をつけた台本を書いて、自身でも謡って国内外の各地で公演していますが、これは慣れれば全く問題ありませんね。世阿弥も『花鏡』で説いている通り、「工夫」なのですよ。もちろん、古典能をずっとやって来られた演者の方たちには違和感があるのでしょうけれども、そこはご自身で謡いながら体得していただくしかありません。

——装束などはどうなさるのでしょうか。

宗片　共同演出の津村禮次郎師にもお願いしているのですが、まだ決めかねているところもあります。もちろん能として違和感のないようにと考えていますが、欲を言うと、ブライズ先生はイギリス人ですし、ハーディング先生はアメリカ人ですから、なんとなくそのあたりがわかるようにできたらなとは思っています。

メッセージを込めて

——みどころを教えてください。

宗片　みどころというよりは聞きどころ、といいましょうか。随所に先生からの大切なメッセージをちりばめています。先ほどの、徴兵を忌避した際におっしゃった「人を殺めることは出来ない」という言葉や、チラシにも掲載しましたが「人生の目的は互いに理解し合うこと。とりわけ男は女を、女は男を。また民族はほかの民族を。民族というのは幻想にあらざれば……」というのもそうです。それと、先生の生き方の根本となる〈禅〉ということ。先生はロンドンの刑務所を出た後に大学に進学し、教職免許を取得して朝鮮の京城に赴任することになるのですが、当時の京城は日本の占領下でしたから、そこで鈴木大拙さんの〈禅〉と出会うわけです。〈禅〉には、生死を超越して自然を生きるという考え方があって、この「大自然の命を生きること」……それはヘンリー・ソローの思想であり、ひいては先生が愛した俳人の芭蕉の世界観と繋がって行きます。実は、日本ではあまり知られていませんが、世界中に俳句を広めたのはブライズ先生なのです。先生はご自身の著作『HAIKU（俳句）』の中で、芭蕉や蕪村といった俳人の句を英訳して紹介し、世界中の小説家や詩人、批評家たちに大きな影響を与えました。この本の中にも芭蕉を評して「誠実な心からの〝生あるものへの同情〟」という言葉が出てきますが、そういう生命観に基づく先生の遺された言葉の数々を是非直接伝えたいと思うのです。また最後にもうひとつ、先生の最大のメッセージが「この世はユーモアなしでは生きられない」というもの。これは、私が大学院のゼミの最後の日に先生から直接教わった言葉です。『シェイクスピア劇の中にあらわれる愛』というテーマのゼミで、先生は「シリアスな愛は確かに美しい。ただ、それだけではこの世は生きていけない」と「愛にはユーモアがなくては、とってもやっていけないのだよ」とおっしゃったのです。その日は何故か私以外のゼミ生が皆欠席していて、先生との初めてのマンツーマンでの授業でした。厳しい先生でしたので緊張しながら、私は「ジュリアス・シーザー」について発表しましてね。結局、これがブライズ先生の最後の授業になりました。あの日のことは忘れられませんね。ブライズ先生の最後の言葉に、「人生は、その苦闘が絶望的なる時にのみ意味がある」という言葉があります。先生の生き方そのもののような、魂の言葉だと思いませんか？　私は今つくづく、こう考えます。先生は、先ほどもお話しました芭蕉、それと音楽家バッハを大変尊敬しておられました。そこにもうひとつBを加えて、宗教心の篤い〝世界の三大B〟として、バッハ、芭蕉、ブライズになるのではないか、とね。

公演当日は、英訳もつけた詞章を配るつもりです。私は新作を上演する時は原則として対訳台本を配っています。やはり、ドラマというのはコトバがわからないと楽しめませんからね。

——演出をされる上で留意された点などはありますか。

宗片　理想をいうと、初めて能を観る方にも退屈しないで観ていただけるように、出来れば「もう一度観てみたいね！」となるように演出しています。世阿弥の言葉にも「見所を本にする」とあるように、やはり演じる側が自分本位になってはいけなくて、お客さんを第一に考えて上演すると言うことが大切だと思っています。くわえて、能——特に新作能は、役者を見せる歌舞伎とは違い、作品のメッセージをどう伝えるかということが何よりも大事です。ところが、最近の能を見ていると、笛が変に大きな音を出したり、鼓のカケ声も妙に目立ったりで、アンサンブルを大切にしてほしいなと思うことが少なくありません。初心の観客のためにも囃子は抑制して、あくまで劇を中心に、また舞も短いほうが良いでしょう。これは新作に限らず、古典能についても言えることです。ですから、私は稽古の際に「アンサンブルを大切にドラマを組み立ててほしい」ということは度々言っています。またその分、今作では本文には掛からないところで、途中に一管と無謡一調とを入れています。その部分は彼らの独演ですから、「エッ！」って思うような演奏をしていただけるのだと思います。また、今回の公演にはブライズ先生のお嬢さんのご主人と、そのお子さん、つまり先生のお孫さんがいらしていただけることになっています。能に拘りすぎず、ご覧になったみなさんが楽しかったとなるような舞台を目指して、しっかり作り上げていきたいと思っています。

＊　＊

今公演詳細、およびチケットの申込先については、本紙1面掲載の広告をご覧ください。